

海外林業研究会々員の広場

嫌われても国際協力 (9) 立派な悪い見本

A 国 B 大学 C 研究所の所長 D は、着任後ほどなくして「金の亡者」と呼ばれるようになった。彼が口にするのは、「大学からのお金が無いから……。まずお金を出してください。」である。研究の方針や組織運営にはまったく展望が無く、外の人には金をせびり、立場が上の人にへつらう。その一方で、相手が自分より弱いと見るといばりちらかす。弱い立場の職員達にとって苦痛の日々が続いた。D が所長を努めた 4 年間は C 研究所の暗黒時代であった。

C 研究所の教官は基本的に E 学部からの出向である。D が所長の権限を振りかざし、不透明な資金管理と独断による組織運営をつづけたことから、E 学部の教官までもが C 研究所から距離を置くようになった。D の勝手にとおったのは、誰もが D と話をするのを嫌がったからである。4 年間の悪政の後、D は E 学部に戻った。しかし所長時代の行動により D を責任ある役職につけたいと考える教職員は一人もいなくなっていた。学部にもどって 1 年半の間、互選の役職に立候補しては最低得票（自己票 1）で落選し失笑を買っている。

私には、B 大学の関係者に言い続けていることがある。「プロジェクトの申請に D の名前が入っていれば、日本人は×をつけます。D の名は失敗確実を意味しますから。」また「間違っても責任あるポストにつけてはいけませんよ。一人で悪いのは仕方ないけど、他の人に迷惑を及ぼすのは避けないといけませんから。」とも言っている。こうしたことを言えるのは、皆が D の被害者だったからである。圧政のおかげで、団結と協力がうまれたのである。

C 研究所に新しい所長が着任して 1 年以上すぎた今でも、「D のようにはなるまい。D のようにはするまい。」が合い言葉になる。誰かに、「それってまるで D のようじゃないか。」と言われれば、それぞれに自分を見直すのである。邪悪な存在もここまでいけば、「立派な悪い見本」である。そんな見本は、もう二度と見たくないけれど……

日本人が国際協力にあたる時、予算管理は避けて通れない問題である。しかし、職務が変わったとたんに相手にされなくなる、お金が無くなったとたんに周りの人が去っていく。このような人間関係しか作れないなら、国際協力などできない。金（予算）と力（責任）を預かる者は、清く正しくなければならぬ。「金の亡者」に学んだことである。（藤間 剛）